

日本アルコール関連問題学会ニュースレター No.4

2006年4月 発行

今道裕之先生を偲んで

今道先生が、平成18年2月14日早朝、享年73歳で旅立たれました。2月16日のお通夜には多くの方がご弔問に訪れ、広い式場に入りきれず、場外で雨の中に佇む人もあり、翌日のお葬式にも長年理事長として勤務されていた新阿武山病院の職員、大学病院関係者、行政機関の方々、さらに先生にお世話になった方々、断酒会の人たちなど、お通夜・お葬式に2000人近い方々が先生の死を惜しみ悲しみ、最後のお別れにと会場にお見えになりました。長年、精神科医療、特にアルコール医療に携わってこられた先生の業績とお人柄が、偲ばれるお葬式でございました。あまりにも早過ぎる死で、もう先生のお声を聞けないかと思うと残念でなりません。

私が大阪医科大学精神科に入局して5年目の春、今道先生が「今度、茨木市で断酒会があるのだから行ってみませんか」と声をかけていただきました。このことが、私がアルコール医療に携わるようになったきっかけで、爾来36年間、先生とこの大阪でアルコール医療をともに歩んでこられたことは私にとっての大きな喜びでもあり、また先生を師と仰ぐことができたことに誇りを感じております。先生は、病院でのアルコール医療だけではなく、地域の断酒例会に毎週何回も参加されていました。昭和50年前後のことですが「去年一年間で70回参加したかなあ」とおっしゃったことを思い出します。あるとき先生は私に「アルコール医療は、私のライフワークだ」とおっしゃいました。先生は最期まで臨床医として、アルコール医療に専念され、大阪のアルコール医療の発展に貢献されました。

一時期大阪府立精神衛生研究所に勤務されていた頃には、保健所に配属された精神保健衛生員の教育や保健所の現場で何ができるかについて指導をされ、また一方で断酒会の理解者・協力者として関西地域の断酒会の発展に尽力されました。アルコール依存症の治療のあり方が、他の領域の治療モデルとなり得ると確信されていました。

昭和52年から大阪には「大阪地域精神医療を考える会」が発足し、その代表者として活躍されました。その会は、精神医療に関係するすべての職種の人たちが一同に会し、職種間の枠を越え相互に理解し、話し合うことのできる会で、病院の開放化、患者が治療の主体性を取り戻すべく、また社会復帰への援助がいかにあるべきかなど、今道先生の考えられる医療論を展開されたことを思い出します。アルコール依存症でありながら専門医療につながるケースが少ないといった現状の中、一般病院でもアルコール依存症治療ができるのではないかと考えられ、新阿武山病院・クリニックの平野先生



が西淀病院と病診連携を開始され、それをきっかけに今道先生が世話人代表として、「アルコール依存と関連内科疾患研究会」を立ち上げられ、アルコール医療の広がりにも力を尽くされました。

現在の日本アルコール関連問題学会の前身である「アルコール関連問題研究会」が昭和54年に発足しました。発起人の一人として、さらに関連問題学会の理事として、また日本アルコール精神医学会発足当時から理事を務められるなどの学会活動に加え、著書『アルコール依存症 関連疾患と治療』等を通じ、日本のアルコール医療充実のためにも大きな足跡を残されました。さらに先生は、関西で始めて設立されたアルコール医療を専門とした藍陵園病院の初代院長に就任され、退職されるまでの約10年間のその医療内容はその当時の民間病院としては考えられないほど高い水準にあり、今もって我々はそれを凌駕することができていません。設立当初は平野先生が副院長先生で、今道先生を中心に若い医局員らと活発に医療、勉学、研究に励んでおられました。その当時の医師たちが今では、大学・行政の場で、またアルコール医療専門の医師として各地の病院・診療所で活躍しています。先生は医師の教育ができる教育者でもありました。

ある事情で退職されたあと、昭和62年より特定医療法人大阪精神医学研究所新阿武山病院の理事長に就任されたのですが、それからの日々は病院の経営と医療に、見ているだけでも本当に悪戦苦闘の日々を送られていたように感じました。そして、名実ともに大阪で一番素晴らしい精神科病院にするなど立派な経営者でもありました。先生は病院の将来を考えられ、自ら医師の定年制をひき、満70歳になった時点で一番先に退職されました。私の医局時代の教授で世界的な学者でもあった満田先生も、医大で同じように教授定年制を取り入れられ、最初に退職されており、その潔いお姿に、私には重なる思いがいたします。

先生は昭和57年頃に最初の心筋梗塞を患われ、10年後に二度目

の心筋梗塞。循環器科に通院しながらの体であったにも関わらず、長年にわたってかくも偉大な業績を残された影には奥様の暖かくたゆまぬ支えがあればこそと思っています。「あいつには頭があがらんのやー」と呟かれたことがありました。

アルコール医療を志したときから自助集団である断酒会の人たちとともに先生は歩んでこられました。断酒会を支援し、発展に協力し、先生の存在は断酒会の大きな支えでもありました。先生がアルコール依存症の患者さんのことや断酒会のことなどを話されるときは、いつも楽しそうでした。「和気君なあ、どんな患者さんであつてもみはなしたらあかん。失敗しても失敗しても切り離してはダメだ。死んでしまつたらどうしようもない。生きてくれていたらまた立ち直る機会が必ず来るものです。」と私に語っていただいたことを今は懐かしく思い出します。

一昨年、12月に新阿武山病院理事長を退任された後、休むまもなく本の執筆に取り掛かれ、腹部の異常を感じながらも執筆が終わるまで、と検査を先延ばしにされていたと聞いております。この本の根底に流れるものは、先生の医師としての生き様であり、哲学であり、患者さんたちへの限りない愛であります。残された私はこれから先、アルコール医療に携わっていく上で、この本を最後まで診療の指針としていきたいと思っております。

先生は、病院の中、行政の場、また学会活動等幅広くお仕事をなされましたが、臨床アルコール専門医師としての視点から最期まで外れることなく、見事な人生を全うされました。先生のご功績とお人柄を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

医療法人和気会 新生会病院 理事長 和気 隆三

各ブロック活動報告

北海道ブロック

アルコール保健医療と地域ネットワーク研究会「アル・ネット」

「アル・ネット」は、1970年代の「勉強会」から始まり、「北海道アルコール医療研究会」、「アルコール保健医療と地域ネットワーク研究会 アル・ネット」へと、北海道という広い地域で孤立しがちなアルコール医療関係者の情報交換や仲間作りを支える場として活動を続けて参りました。日本アルコール関連問題学会の前身「日本アルコール医療研究会」の頃から北海道ブロックとして日本中の仲間の輪をつなげてきたのです。

今、これらネットワークの輪が、アルコール医療のみにとどまらず、他の精神障害や地域保健の課題に対応するネットワークとして広がりを続けています。

これからもアルコール関連問題だけではないネットワークの輪をつなげていきたいと考えています。

「アル・ネット」恒例の学術宿泊研修会は、平成17年11月26日(土)・27日(日)帯広市で第13回学術研修会を開催いたしました。参加者は当日参加をふくめると約100名、交通の利便性を考慮した会場設定のため「夜を徹してのディスカッション」とはいきません

東海地区

東海ブロックからは、まず愛知の話題です。アルコール関連疾患に対する内科医と精神科医との連携医療は、地域の主要な総合病院とアルコール専門医療機関をネットワークで結んだ三重県モデル(「三重県アルコール関連疾患研究会」)がよく知られていますが、同様の試みが今年愛知県でも始められようとしています。連携医療に意欲的な総合病院医師や精神科クリニック医師らの呼び掛けに愛知県下の大学医学部・アルコール専門医療機関など多くの賛同者が集い、目下準備会合が重ねられているところです。

アルコール・プログラムを持つ精神科病院が比較的多く、また精神科・一般科を問わず看護研究会活動が盛んである愛知県においては連携医療の効果への期待は高く、内科臨床におけるアルコール依存症のスクリーニングや介入、専門治療機関との併診や紹介診療が進めば、アルコール依存症の一次予防・二次予防にも大きく貢献するものと思われます。大切に温められ、是非実現をと待たれる活動です。

でしたが、プログラム内容は参加者に好評をいただきました。本年度、平成18年第14回学術研修会は秋の開催を予定しております。苫小牧市の看護の仲間が中心となって実行委員会を組織し、その準備を進めています。「地域医療ネットワーク」・「内科医との連携」などをキーワードとし、さらに、「アル・ネット」の仲間の輪を広げる場としてアルコール関連問題初心者にも魅力あるプログラムを考えてくれるものと期待しています。

アルコール保健医療と地域ネットワーク研究会

「アル・ネット」事務局

〒064-0946 札幌市中央区双子山4丁目3-33

医療法人北仁会旭山病院医局内

TEL 011-641-7755, FAX 011-631-5512

代表幹事 山家 研司(医療法人北仁会旭山病院 院長)

E-mail: a-ikyoku@gray.plala.or.jp

「アル・ネット」ホームページアドレス

<http://www.sapmed.ac.jp/sapmed/npsy/alnet/contents/introduction/index.html>

次は静岡です。今年静岡では静岡ダルク、静岡NAがそれぞれ開設され県内に活動の拠点を置きます。薬物依存症治療へは県内ではこれまでほぼ医療のみの対応に限られていましたが、社会復帰を目指す地域のミーティング施設・相談施設の設置は薬物依存症の後治療に新たな展望を期待させます。

終わりに岐阜県の話です。岐阜県で最も老舗の断酒会・岐阜東濃断酒会新生会が創立40周年を迎え、8月27日恵那市文化センターを会場に記念大会を開催します。東濃断酒会新生会は昭和41年県内の一病院の院内断酒会として発足。その際には静岡県の同志の多大な助力があったとのこと。その後はお墨院者を中心に地域断酒会として全断連に加入。多くの回復者を生みながら歴史を今日に刻んできました。昭和49年には、それまで断酒会のなかった県の中心・岐阜市に断酒会を発足させる礎ともなりました。記念大会では『幸せへの道』をテーマに、北海道石橋病院長・白坂知信医師の記念講演が予定されています。(事務局 各務原病院 天野 宏一)

北陸地区

各県とも心の健康センターあるいは精神保健福祉センターがアルコール・薬物関係の研修会・講演会を開催し、センターあるいは保健所で相談会などを開催している。勉強会では石川県でおこなっているアルコール依存とアディクション勉強会が4ヵ月に1度ケース検討や勉強会、学会報告、そして講演会と自助グループとの交流会を開いている。北陸に限らないであろうが、医療状況が激しい

中国四国ブロック

平成17年度の中国四国アルコール関連問題研究会は、昨年高松国際ホテルで盛大に開かれました。今年は9月9-10日、鳥取市で開催されます。次に各県の活動を簡単に紹介します。

<鳥取県> 今年9月9-10日、白兔会館にて第24回中国四国アルコール関連問題研究会が開催される予定です。

<島根県> 平成17年度総会が8月20日に開催され、広島市子ども療育センターの岡田隆介心療部長の講演がありました。第24回山陰嗜癮研究会は、今年2月18日に島根県民会館で開催、アルコール関連問題関係者会議は昨年8月26日に松江市合同庁舎で行われました。アルコール関連問題「家族問題セミナー」は、昨年8月5日に江津市総合市民センターで地域版が、11月15日に県立出雲工業高校で学校版が開催されました。若年飲酒に関するパンフレットを5000部作成して関係諸機関に配布しました。(山陰嗜癮行動研究会事務局 精神障害者地域生活支援センター ビ・フレンジングTEL0852(23)4111)。

<広島県> アルコール関連問題の地域ネットワークの振興と普及、ならびにアルコール問題に携わる専門職の方々との親睦を深めることを目的とする「ひろしまアルコール関連問題ネットワーク(通称:ひろしまALNET)」の発足を予定しております。準備室は草津病院です。今年5月より、関連問題学会評議委員の東山良子さんが、相談、講演会やワークショップのために「ひろしま家族機能相談所」を開業することになりました(広島市中区富士見町11-6 エソール広島803号室、TEL/Fax.082(249)4121)。

<山口県> 高嶺病院のアルコール勉強会が今年2月には第50回を迎えました。第50回勉強会では、猪野亜朗先生に記念講演をし

九州ブロック

九州沖縄各県と北九州市で順に開催している九州アルコール関連問題学会は、今年度は熊本県の当番年度で平成18年3月3日と4日の両日、くまもと県民交流館パレアで菊池有働病院南龍一大会会長の下に開催されました。時代の推移と共にアルコール関連の学会で扱われるテーマも、近年は、薬物、ギャンブル、暴力などアルコール以外の様々な嗜癮問題に広がりを見せていましたが、今回は今年11月3日～5日に熊本で日本嗜癮行動学会が開催されるという事情もあって、今回の第18回九州アルコール関連問題学会は、「アルコール関連問題再考:アルコール・アルコール・アルコール」とアルコールに拘ったテーマとなりました。1日目の分科会は、「基礎講座」、「女性とアルコール依存症」、「高齢者・定年後等のアルコール問題」、「プレ・アルコール」、「一般演題」などの分科会が開かれ、2日目の公開講座では、アスクの水澤都加佐さんが「クロスアディクションはなぜ起きるか?」というテーマで講演されまし

ため公立病院でもアルコールにこれまでのようには対応できなくなっているところもあり、各地域で連携やアルコール医療従事者や後継者育成が必要となっている。なかなか輪が広がらずしんどい状況である。

(事務局 ひろメンタルクリニック 奥田 宏)

ていただき、123名の県内外の関係者の参加がありました。

<香川県> 第23回中国四国アルコール関連問題研究会が、昨年9月3-4日、高松国際ホテルにて開催されました。

<徳島県> 徳島県アルコール関連問題研究会を立ち上げる予定です。

<高知県> 県の精神保健福祉センターでは、「高知ACの会」が機関紙『風Joi's Wind』を刊行するようになりました。岡豊病院では、「学びの場」を立ち上げ勉強会が開かれるようになりました。また、高知大学精神科学教室も、アルコール問題を一部テーマに含む研修会を3月に開催しています。断酒会は3月26日に第41回四国断酒ブロック(高知)大会を開催、5月13-15日には第62回松村断酒学校を開催予定です。また、高知アルコール問題研究所は7月23日開催予定ですが、今年も飲酒運転をテーマに取り上げJRバス関東元会長をお招きします。下司病院関係では、昨年9月4日に中四アル研シンポジウムにて、『多様化するアルコール関連問題一統一的アプローチは可能か?』というテーマで、また、9月27日には土佐市高吾医師会で『アルコール依存症の病態及び関連する内科疾患』と題して山本院長が講演しました。

<岡山県> 岡山県アルコール関連問題研究会は、第38回を昨年11月26日 慈圭病院で、第39回を今年3月18日 倉敷中央病院で開催しました。第40回は今年12月2日に県立岡山病院で開催予定です。岡山アルコール懇話会(世話人 柳田公佑・河本泰信・堀井茂男)は、県立岡山病院にて毎月第2月曜日に開催されており、この4月で156回を迎えます。

(事務局 慈圭病院 堀井茂男・大羽博志)

た。九州アルコール看護研究会が昨年11月に、日本アルコール看護研究会が本年2月にいずれも熊本県内で開催され、熊本でのアルコール関連の学会開催が短期間に重なったこともあって、当初参加者数の減少が心配されましたが、例年通り300名程度の参加を頂き、2日目の公開講座は会場がほぼ満席の盛況でした。来年度は3月2日、3日に北九州市で八幡厚生病院斎藤藤院長を大会会長に開催される予定になっています。

事務局連絡先

〒842-0192

佐賀県神埼郡吉野ヶ里町三津160

肥前精神医療センター 東4-2病棟

TEL:0952-52-3231(内線340) e-mail:al-jimukyoku@hizen2.hosp.go.jp

事務局のある肥前精神医療センターは、これまで東脊振村にありましたが、この3月の市町村合併により吉野ヶ里町になりました。

第28回日本アルコール関連問題学会

テーマ「出来たこと、出来なかったこと、まあいいか」

会期 平成18年6月23日(金)～24日(土)
会場 仙台国際センター 仙台市青葉区青葉山
大会長 相澤宏邦(医療法人 東北会病院 理事長・院長)

プログラム

1日目

基礎講座

- | | |
|----------------------------|-------------------|
| 1. 「アルコール依存症の基礎と臨床」 | 坂本 隆 (藤代健生病院) |
| 2. 「アルコール関連疾患における内科医療の関わり」 | 新澤 陽英 (山形県立日本海病院) |

専門講座

- | | |
|--|---------------------|
| 1. 「アディクション・アプローチ - その後」
～ 自助グループ依存と過剰な医療化からの転換 | 信田 さよ子 (原宿カサリンセンター) |
| 2. 「情報活用能力と援助関係作りの技法について」 | 宮本 真巳 (東京医科歯科大学) |

分科会

- ① 「アルコール依存症はからだの病気である」
- ② 「燃えた、尽きた、でも…」(意欲、燃え尽き、喜び)
- ③ 「高齢社会とアルコール関連問題～どう向き合うか?～」
- ④ 「未成年者のアルコール問題をめぐって」
- ⑤ 「家族」と「アルコール依存症」と
- ⑥ 「アルコール問題としての抑うつと自殺」
- ⑦ 「クロス・アディクトとどうつきあうか?当事者研究を中心に」
- ⑧ 「ソーシャルアクション～踏み出しやすい初めの一步～」
- ⑨ 「職場におけるアルコール関連問題とその対応～これまでとこれから～」
- ⑩ 「アルコール関連問題における保健師の役割と展望」

2日目

ポスターセッション (公募中)

特別講演

「治療的介入について」 講師: John B Saunders
(Professor of the University of Queensland)
(Medical Director, Royal Brisbane and Women's Hospital)

特別企画

ランチョン・セミナー (共催: ヤンセンファーマ株式会社)

「アルコール依存症と統合失調症: その合併と治療」 松本 出

(シドニー大学神経病理学教室、NSW 統合失調症関連疾患研究所)

※参加人数に限りがございます。オリエンテーションにてご案内いたします。…定員: 約230名

サテライト・ワークショップ

「治療的介入の理論と実際」 John B Saunders

※参加申込が必要です。(別途、参加費をお支払い頂きます)

アディクション・フォーラム (主催: アディクション・フォーラム実行委員会)

「病気になってよかった～仲間との出会いの中で～」